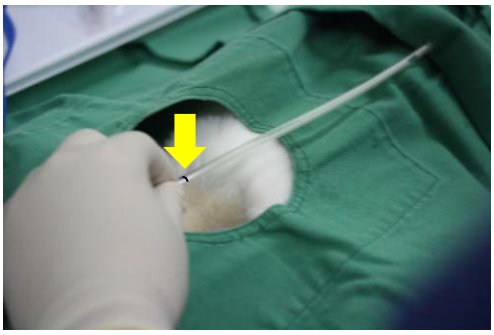
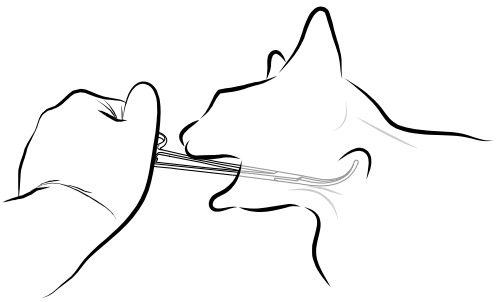
1. 麻酔下の患畜を右横臥位に寝かせ、頚部を毛刈りした後、消毒して準備する。

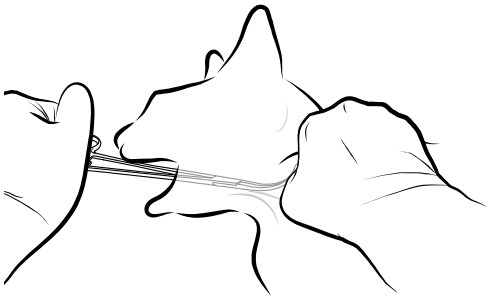
2. カテーテルを患畜にあてがい、予め頚部食道から第5～8肋間まで、必要になるカテーテルの長さを確認し、目印を付けておく。



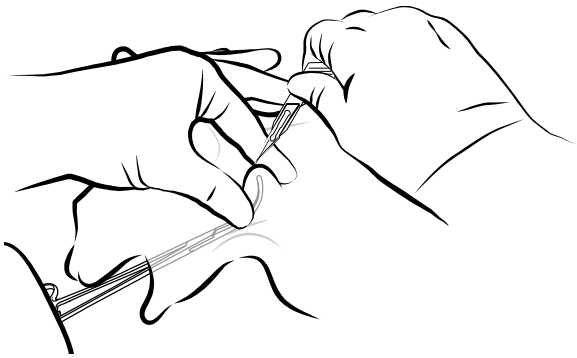
3. ケリー鉗子（中・大型犬ではカーマルト鉗子）を、先端を外側に向けて口腔から頚部食道へ挿入する。鉗子のハンドルをテーブル面に向けて押し下げることで、鉗子の先端で食道壁を外側へ突き上げつつ、頚部を触診して食道が一番浅い場所を決める。首の下にクッションやタオルを入れておくとやりやすい。



4. 鉗子で押し上げている箇所の皮膚を反対の手で押さえて頚静脈や頚動脈、神経などを押し退け、それらを傷つけることがないようにする。

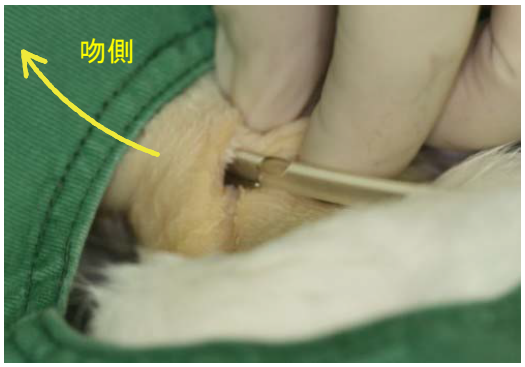


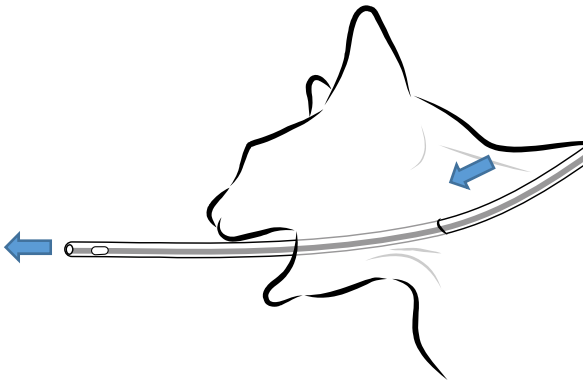
5. 突き上げている鉗子の先端直上の皮膚にスカルペルで切開を加え、



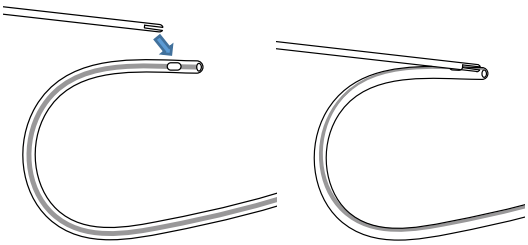
切開部から体表へ鉗子の先端を突き出す。

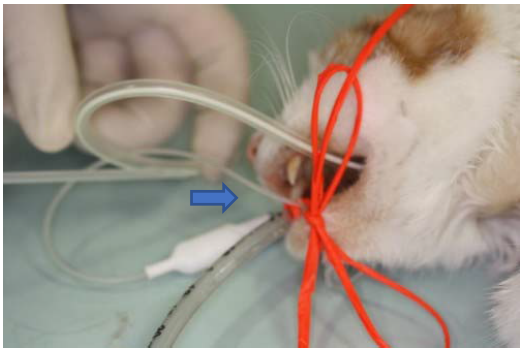
6. 突き出した鉗子の先端でカテーテル先端を掴んで吻側へ引き込み、口腔から引き出す。



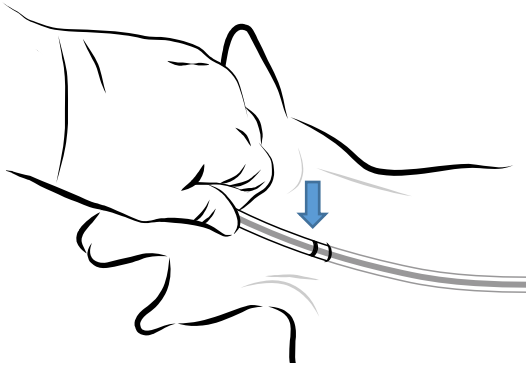


7. 引き出したカテーテルの向きを反転させ、カテーテル先端のサイドホールにプッシャー先端の切り欠きを引っ掛け、再びカテーテルを食道内へと送り進める。カテーテルが気管チューブやタイと絡まないように注意する。反転させたことによるカテーテルの屈曲がとれない場合は、体外に出ているカテーテルをゆっくりと回転させる、または引き戻すと解消できる。



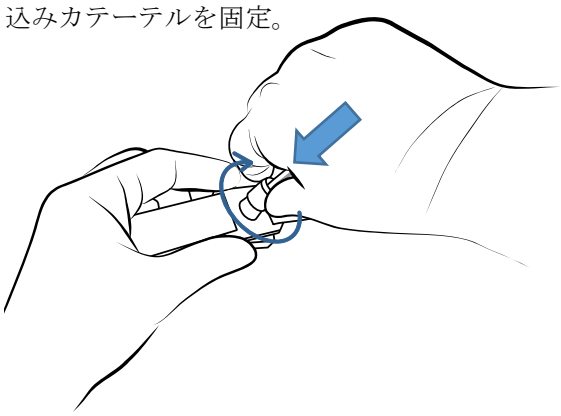


8. あらかじめカテーテルに付けておいた印を目安に留置長が適切な長さとなるよう位置を調節する。体外に出ているカテーテルが長い場合は適当な長さに切り整え、末端にアダプタを取り付ける。



9. ラテラル像でカテーテルが適切な位置に設置されたことを確認する。

10. カテーテル固定板と創傷パッドを体表創部に接する位置までスライド移動させ、圧締キャップを固定板の突起部に時計回りに回転させつつ押し込んで締め込みカテーテルを固定。



頚部固定用首輪ベルトを患畜の頚部にかけ、患畜にあわせてベルトの長さを調節する。

11. カテーテルからの給餌は、覚醒後に当日から行うことができる。最初の 1 週間は瘻孔の状態を 1 日毎に確認し、必要に応じて創傷パッドを交換する。

12. カテーテルが必要なくなったら首輪ベルトを解き、カテーテルを抜去する。抜去後、頚部は二次治癒により瘻孔が塞がるまで包帯で保護する。